第12章
針尾島の歴史と文化財

針尾島の位置

この地域の小中学校

小学校：江上小学校、針尾小学校

中学校：東明中学校

第12章　針尾島の歴史と文化財

急潮の島

針尾島は、南北約10キロメートル、東西約6キロメートルの島です。本土との間にある早岐瀬戸が川のように見えるため、島というイメージは薄いかもしれません。

島の南東側に広がる大村湾は、針尾瀬戸（伊ノ浦瀬戸）と早岐瀬戸で外海とつながっています。

そのため針尾瀬戸では潮の満ち干きの時に、海水が渦をまいてダイナミックに出入りし、その様子から[1]日本三大急潮の一つに数えられています。春の大潮の時は、特に見ごたえがあり、たくさんの観光客で賑わいます。

針尾瀬戸（伊ノ浦瀬戸）

1　針尾瀬戸、鳴門海峡（徳島）、早鞆ノ瀬戸（関門海峡）、または針尾瀬戸、来島海峡（愛媛）、黒之瀬戸（鹿児島）。ちなみに「瀬戸」とは、両側の陸地の幅が特に狭い海峡のこと。

針尾瀬戸の渦潮

針尾瀬戸ほどではありませんが、早岐瀬戸でも、観潮橋付近でかなりの急潮がみられます。そのため、奈良時代には「早岐」のもとなる「速来」という地名が生まれました。

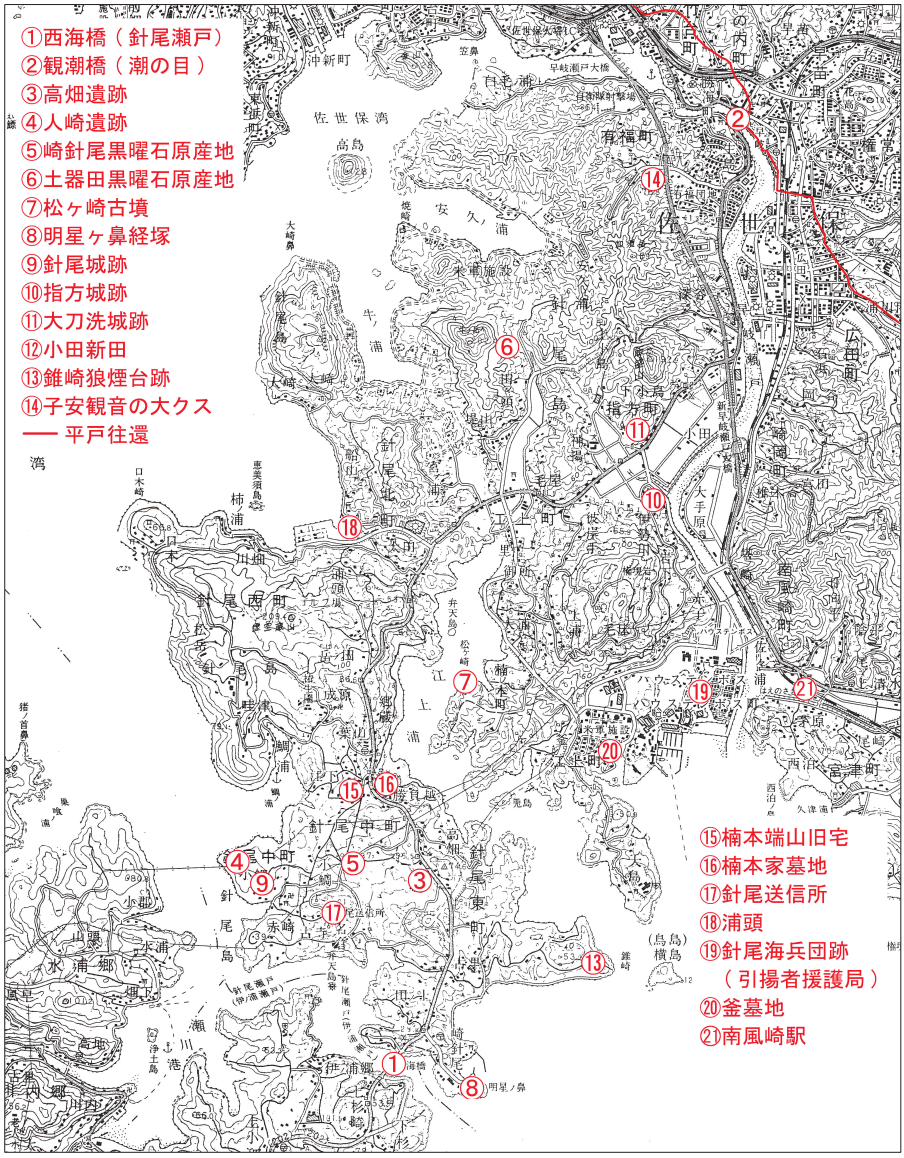
また、江戸時代には、「潮の目」として[2]平戸八景の一つに数えられました。

2　平戸往還沿いの8ヵ所の名勝・奇勝（優れた景色、普通ではない変わった景色）。佐世保の「眼鏡岩」、「巌屋宮」、「羅漢窟」、「潮の目」、江迎の「潜龍の瀧」、「高岩」、吉井の「御橋観音の天然石橋」、小佐々の「大悲観」の総称。

針尾島は山や丘が多く、平地は江上や指方にわずかにみられるだけです。また、北部にいくつもある尖った小山は、火山活動によって出来た溶岩ドームだと考えられています。そのため、火山性噴出物の一種である[3]陶石（網代石）や黒曜石の原産地があります。同じような地形は、宮地区にもあります。（第13章宮参照）

江上地区の溶岩ドーム（指方城跡）

3　焼き物である磁器の原料になる石。陶石の産地は有田泉山、針尾三ツ岳、熊本県天草が有名。


①西海橋（針尾瀬戸）
②観潮橋（潮の目）
③高畑遺跡
④人崎遺跡
⑤崎針尾黒曜石原産地
⑥土器田黒曜石原産地
⑦松ヶ崎古墳
⑧明星ヶ鼻経塚
⑨針尾城跡
⑩指方城跡
⑪大刀洗城跡
⑫小田新田
⑬錐崎狼煙台跡
⑭子安観音の大クス
── 平戸往還
⑮楠本端山旧宅
⑯楠本家墓地
⑰針尾送信所
⑱浦頭
⑲針尾海兵団跡
（引揚者援護局）
⑳釜墓地
㉑南風崎駅

針尾島の地図

黒曜石の原産地

針尾島は、黒曜石の原産地が多いことで有名です。黒曜石は溶岩の一種で、天然のガラスです。割れ口がカミソリの刃のように鋭いため、石器時代には、刃物や矢じりの材料に利用されていました。

原産地は、送信所周辺（針尾中町）、古里海岸（針尾東町）、土器田（江上町）の3ヵ所が有名です。特に送信所周辺では、拳大から卵大の原石が畑に無数に散らばり、昔は畑を耕すとき鍬にあたって大変苦労したそうです。

針尾島の黒曜石（送信所周辺）

土器田黒曜石原産地

黒曜石は、佐世保地方の石器時代の遺跡に普通にみられ、直接または、交易によって原産地から消費地（遺跡）に運ばれました。九州北西部には原産地が多く、針尾島以外にも腰岳（伊万里市）や牟田（松浦市）、そして佐世保市内の東浜（第2章日宇川流域参照）が有名です。

黒曜石は、産地によって色や形、成分などに違いがあるため、詳しく調べれば、どの産地の黒曜石なのか分かります。ちなみに、泉福寺洞窟から出土した最古の土器「豆粒文土器」（第4章相浦谷参照）の時期には、土器田と牟田の黒曜石が主に利用されていました。

針尾島の遺跡

針尾島には旧石器時代や縄文時代の遺跡が点在していますが、そのほとんどが[4]遺物散布地となっているため、発掘調査は行なわれていません。

針尾中町の人崎遺跡は、発掘調査が行われた数少ない遺跡の一つです。調査により縄文時代晩期（約2,500年前）の遺跡と分かりました。すでに福岡平野では米作りが行なわれていた時期の遺跡ですが、人崎遺跡からは米作りに関係する遺物は出土していません。その代わり、鍬として使われた打製石斧が発見されていますので、畑作りをしていたと考えられます。

人崎遺跡遠望

4　遺跡の一種だが、本来遺物が含まれている地層が雨や風の浸食で失われ遺物が散らばっている状態の遺跡。

高畑遺跡の遺物
※右側が扁平片刃石斧

また、古里の丘の上には、たくさんの矢じりが発見された高畑遺跡があります。最初は縄文時代の遺跡と考えられていましたが、弥生時代に特徴的な「[5]扁平片刃石斧」という石器があり、さらに、矢じりが中里の四反田遺跡（第4章相浦谷参照）から大量に出土した、大型で作りの粗い矢じりと同じタイプであることから、ここは弥生時代の遺跡と分かりました。

この二つの遺跡を残した人々は、すでに低地で米作りを行う時代だったにもかかわらず、高地で畑作や[6]焼畑、そして狩猟を行って生活していたと考えられます。

5　中国大陸から伝来した石器で、主に材木の加工に使われた。
6　森の木を伐採した後に火をつけ、燃えた後の灰を肥料にして畑を作る原始的な農法。

海を望む古墳

大村湾が深く入り込む江上浦の中ほどの岬の先端に、松ヶ崎古墳があります。

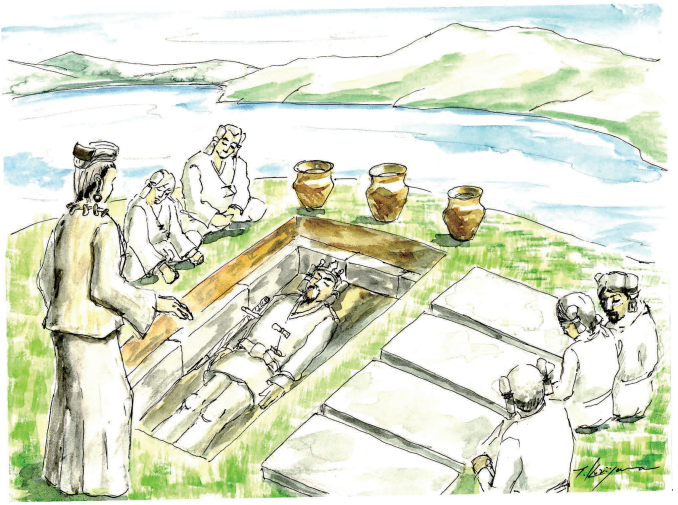
発掘調査では、砂岩の板石を組んだ大形の石棺が見つかりました。弥生時代や古墳時代の石棺は、ほとんどが1人用なので、幅は肩が入る程度で、長さも160センチメートルくらいの大きさが普通です。しかしこの石棺は、幅約110センチメートル、長さ180センチメートルの大きさがあったことから、一族のお墓だったと考えられています。人骨は残っていませんでしたが、鉄の直刀が出土しました。

松ヶ崎古墳の石棺と直刀

松ヶ崎古墳遠望
※鉄塔がある岬に古墳があった

松ヶ崎古墳の特徴は、入り江に面した岬の先端に築かれたということです。このような古墳は、対馬の浅茅湾にもみられます。ひょっとすると、古墳時代の針尾と対馬は、何らかのつながりがあったのかもしれません。

松ヶ崎古墳に葬られた人は、約1,500年前の古墳時代に針尾にいた豪族であることは間違いありません。彼らがどこに住んでいたのかは分かっていませんが、広い平地がある江上浦の奥ではないかと考えられています。



オサを葬る人々

イラスト：栗山奉文

明星ヶ鼻経塚

佐世保市では、奈良時代や平安時代の遺跡があまり見つかっておらず、その時代にどこにどのような人々が暮らしていたのかは、ほとんど分かっていません。針尾も例外ではありませんが、唯一、平安時代の終わり頃の遺跡として、明星ヶ鼻経塚があります。経塚とは、古代の仏教遺跡の一つで、経文を地下に埋めた遺跡のことです。（第9章広田参照）

明星ヶ鼻経塚からは、昭和の始め頃の開墾で経筒が発見されました。明星ヶ鼻は、西海橋近くのコラソンホテルのある半島の先端部の地名ですが、発見の詳しい場所は今では分からなくなっています。

経筒は、滑石で作られた、高さ34.7センチメートル、底の直径10.5センチメートルの円筒形で、経文を納めるために中心をくり抜いています。経文は残っていませんでしたが、経筒には珍しいことに文字が彫られていました。文字からは、文治5年（1189）の10月に経塚が造られたこと、そして、埋経を勧めたのは永金という僧侶であることが分かりました。しかし、経塚を造った人の名前は、発見のときの鍬傷で削られてしまい分かりません。

明星ヶ鼻経筒

明星ヶ鼻経筒写真解説

経筒中央に「文治五年　歳次　己酉　十月」、下段の左に「大勧進僧永金」、下段右に「□主…」の文字が刻まれている。（□＝不明文字）

埋経を伝えたのはお坊さん

さて、遠く京都で始まった埋経が日本の西端の針尾まで伝わったことは、明星ヶ鼻経塚によって知ることができます。

埋経を勧めた僧侶の永金は、京都から遠く針尾に埋経を伝えた人なのです。恐らく、永金は全国を渡り歩いて布教し、本寺への献金を勧める営業マンだったのでしょう。

針尾といえば日本の西端の辺境の地であり、ずいぶん苦労を重ねてこの地にやって来たはずです。そして、そこにいた有力者に埋経することを営業、つまり勧めたのでしょう。これは、布教と同時に埋経という文化も伝えたことになります。

広田の三島山経塚のように、経塚には輸入品などの貴重な品物を入れることが多く、相当な財力をもった人でないと経塚を築くことはできませんでした。明星ヶ鼻経塚を築いた有力者とは、戦国時代に島の南部を支配した針尾氏の祖先だと考えられています。

武士の登場

明星ヶ鼻経塚以外に平安時代の遺跡は見つかっていませんが、当時の針尾は京都の貴族が持つ彼杵荘と呼ばれる[7]荘園の一部だったという記録が残っています。こうした荘園を現地で管理して力を伸ばしたのが、針尾氏や佐志方氏といった武士たちでした。針尾氏と佐志方氏はそれぞれ針尾島の南と北を支配していました。このうち針尾氏は鎌倉時代に幕府の御家人（家来）になっています。

7　貴族や寺、神社が持つ田畑のこと。地方の武士は、税を逃れるために、自分が切り開いた田畑を貴族や寺、神社に寄付し、その管理人となった。

針尾氏と横瀬浦事件

戦国時代、針尾氏は1563年（永禄6）に起こった「横瀬浦事件」により世界史の舞台に登場します。当時、横瀬浦（西海市）には日本最初のキリシタン大名となった大村純忠（[8]洗礼名：ドン・バルトロメウ）によって、ポルトガルとの貿易港が置かれていました。当時の針尾氏の当主、針尾伊賀守はこの横瀬の奉行を務めていました。ところが、武雄の領主である後藤貴明と共謀して、純忠の招きで横瀬浦から大村へ向かう外国人宣教師たちを針尾瀬戸で襲ったのです。

現在の横瀬浦

幸いにも宣教師たちは急病のため船に乗っておらず助かったのですが、大村純忠の使者である朝長新助（洗礼名：ドン・ルイス）は針尾伊賀守によって殺されてしまいました。

8　キリスト教徒としての名前。

危うく助かった宣教師の一人、[9]ルイス・フロイスは、著書の『日本史』でこの事件をヨーロッパに伝えました。その中で、針尾伊賀守を「ハリボウ」と紹介し、「大村の海がきわめて潮の流れ激しく狂奔する海峡のそばに城を構えていた。」と記録しています。これが針尾中町にある針尾城（小鯛城）です。

横瀬の町は、この事件の混乱を利用して貿易代金の踏み倒しを狙った豊後（大分）の商人によって焼き払われてしまいました。教会が建ち、商人も集まって貿易港として発展しようとした矢先の事件で、横瀬浦はもとの寂しい港に戻ってしまったのです。

針尾城遠望（海上より）

9 ポルトガルの宣教師。織田信長や豊臣秀吉に会見したことがあり、日本での活動を報告する『日本史』を執筆した。

第12章

コラム～針尾城（小鯛城）～

2004年（平成16）に発掘調査が行われた。城跡は海岸を見下ろす標高25メートルの丘にあって、西、北そして東側を二重の土塁と空堀で囲み、海岸に面した南側は切り立った崖になっていて、厳重な守りとなっている。

中心部の平場は東西30メートル、南北25メートルの規模があり、ここに針尾氏の館があった。

針尾城の空堀

調査中の針尾城（穴は柱跡）

発掘では、北半分の山側に建物跡が検出された。約300を超える柱穴があるのは、幾度かの建て替えがあったことを示しているが、まだ詳細は分かっていない。海側の南半分は前庭になっていたらしい。

出土した遺物は、火鉢や坏などの土器、碗や皿、壺などの陶磁器、鉄瓶や刀、銭貨などの金属器、引き臼や硯といった石製品など4,000点に及んでいる。

陶器は、備前や周防、九州系の甕やすり鉢があるが、圧倒的に朝鮮、中国、タイからの輸入陶磁器が多い。時代的には13世紀から16世紀後半までとなり、約400年の間、針尾氏がここを拠点にしていたことを示している。特に輸入陶磁器の多さは、当時の針尾氏が、海外との交易を行っていたことを物語るものである。

城跡の南前方には、針尾瀬戸が望まれる。多少防備に不安を残す場所に城を構えたのは、針尾瀬戸を通過する船から城が見えるようにした演出と考えられる。

コラム～事件の背景にあったもの～

世界史上にも登場する「横瀬浦事件」はなぜ起こったのだろうか。事件の背景には、大村氏の跡継ぎ問題があった。日本で最初のキリシタン大名となった大村純忠は、島原の有馬氏から迎えられた養子であり、もともと大村家の人間ではなかった。そして、横瀬浦襲撃を計画した武雄の領主、後藤貴明こそが、大村家の長男、つまり正統な跡継ぎだったのだ。大村家の跡継ぎを約束されていたはずなのに、他家に養子に出された貴明は当然のことながら、純忠を憎んだ。また、家臣の中にもキリシタンとなった純忠に反発し、貴明こそが真の主と考える者が少なくなかった。そこで、貴明はキリシタンと純忠の両方を排除すべく、横瀬と大村の城下町を同時に襲う計画を立てた。

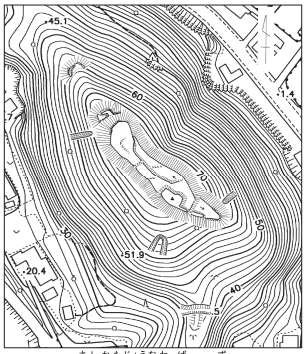
そして、1563年（永禄6）8月、横瀬を針尾伊賀守が、大村の城下町を後藤貴明がそれぞれ襲撃したのである。結果として両方とも失敗し、宣教師も純忠も難を逃れた。

その後も、貴明はことあるごとに純忠の命を狙い、1572年（元亀3）には、諫早の西郷氏、平戸松浦氏と謀って純忠の居城、三城城を包囲するという事件（三城七騎籠り）も起こしているが、結局失敗している。

戦国の針尾

島の東部にいた佐志方氏は、天文年間（1500年中頃）に針尾氏との争いに敗れ、針尾島を追い出されてしまいます。ところが針尾氏は、敵対していた平戸松浦氏が武雄の後藤氏と手を結ぶことになると、佐志方氏を呼び戻し、それまで友好関係にあった大村氏と敵対することになります。

その後、平戸松浦氏と後藤氏の関係が悪化すると、佐志方氏は再び追い出されてしまい、平戸松浦氏を頼っています。



指方城縄張り図

針尾氏は、今度は平戸松浦氏に敵対したのですが、1572年（元亀3）頃に平戸松浦氏が針尾氏を攻めて、針尾伊賀守の次男の針尾三郎左衛門は戦死し、三男の針尾九左衛門は針尾島を追われ、西彼杵半島に拠点を移します。針尾氏は、このとき針尾島を失い、二度と戻ることはありませんでした。

針尾氏は、少なくとも400年の間、針尾島を領した小領主であったのですが、戦国大名の大村氏や平戸松浦氏が力をつけていくなかで、ついには島を追い出されてしまったのです。

針尾氏もそうなのですが、佐志方氏はさらに弱小な武士一族として、戦国大名が支配地を拡大するなかで、次々と同盟の相手を変え、戦国大名たちの勢力のバランスを利用しながら、何とか自分たちの勢力を保とうとしていたのです。

その後の針尾氏と佐志方氏

島を追い出された針尾氏は、大村純忠の家臣となり、230石を与えられる重臣になります。その後、名を児玉氏にかえ、大村で家脈を保ちました。

佐志方氏は、針尾氏がいなくなった針尾に三たび戻ることができました。そして、1586年（天正14）の広田城の戦い（第9章広田参照）では、佐志方善芳が、平戸方の武将として大村方と戦いました。佐志方氏は、そのまま平戸松浦氏の家来として江戸時代を迎えました。しかし、数代の後に、平戸藩を出て滅びています。

盛んな新田開発

江戸時代の針尾島は、平戸藩の南部に位置する農村です。江戸時代後期になると、新田開発が盛んになります。江戸時代初め頃の平戸藩の領地絵図を見ると、有福は早岐瀬戸が深く入った入り江のままで、また、江上支所から鳥越までも海でした。

江上や有福は、1781年（天明元）頃に埋め立てられて水田に変わっています。現在ハウステンボスとなっている場所も、1754年（宝暦4）頃に完成した赤子新田でした。

また、幕末の1861年（文久元）頃になると、外国船への警戒のため、雛崎に狼煙場が造られました。

小田新田
（江戸時代に開発された新田）

西海の大儒・楠本端山と碩水

江戸時代の終わり頃、島の南部の葉山で、後に儒学者として有名になる楠本端山と碩水の兄弟が生まれました。父親が平戸藩士だったので、少年時代は藩の学校の維新館で学び、さらに江戸に留学しています。帰藩後は維新館の教授を勤め、その後、1881年（明治14）に針尾の葉山で私塾「鳳鳴書院」を開き、1883年（明治16）の端山没後も碩水が1897年（明治30）の閉鎖まで学問を教えました。

平戸の維新館から鳳鳴書院まで、教えた門下生は千数百人になったといわれ、鳳鳴書院の碩水門下でも400人に達します。その出身地は青森、新潟をはじめ、全国19都府県に及んでいました。

楠本端山

儒教（儒学）とは、「礼」と呼ぶ秩序と、「仁」と呼ぶ人を思いやる心で治められる社会を理想とする中国を代表する思想。儒学者たちはその実現に向けて様々な研究を行った。日本では、江戸時代に、幕府が儒教を学問の中心と位置付けたため、全国に儒教が広まった。

楠本碩水

端山と碩水の生まれた家は、父の忠次右衛門が、1832年（天保3）に建てたものです。門を入ると3つの玄関があり、右から来客用、家族用、使用人用に分かれ、部屋も二間続きの座敷が2組もあります。さらに、儒教の祠堂も備えるなど、江戸時代後期の平戸藩士の家に儒教の祠堂を併せ持った貴重な建物です。

また、針尾支所の裏手にある楠本家墓地には、端山のものを含め7基の儒教様式の珍しい墓があり、旧宅と併せて長崎県の史跡に指定されています。

楠本端山旧宅

楠本家墓地（右手前が端山の墓）

近代の針尾

1889年（明治22）に海軍佐世保鎮守府が開庁すると、佐世保市内各地に次々と軍事施設が建設されました。

針尾島にも、1922年（大正11）に針尾送信所（旧佐世保無線電信所）が完成しています。西海橋近くにそびえる3本の巨大な塔が、当時の無線塔です。

3本の塔は約136メートルの高さがあり、300メートルの間隔で正三角形に配置されています。塔の基底部は、直径12.12メートル、コンクリートの厚さは76センチメートルもあり、岩盤を約6メートルも掘り込んで建てられました。

針尾送信所遠景

当時、遠く海外との通信には、長波が使われていました。長波は、大変大きな電力で送らないと遠くまで届きませんでした。そのため、このような巨大な施設が必要だったのです。まだ無線塔として使われていたときは、この塔にワイヤーが張り渡されていました。

針尾送信所旧通信局舎

1941年（昭和16）12月2日には、太平洋戦争の引き金を引いた暗号「ニイタカヤマノボレ1208」をここでも中継したと伝えられています。針尾送信所は、戦争の記念碑というよりも、当時の土木技術の粋を集めた建築物であり、文化財としての価値を認められ、2013年（平成25）に国の重要文化財となりました。

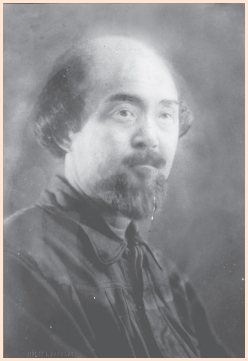
郷土の人～近代初の芸術家・志方　茂～

1889年（明治22）～1935年（昭和10）

針尾の江上村大浦の生まれである。1910年（明治43）に東京美術学校（現東京藝術大学）洋画科を卒業した。在学中の作品「入海の奥」は恐らく郷里の江上浦を描いたもので、文展に入選している。

佐世保地方の最初の洋画家であるが、その才能を開かせる土壌は当時の地元にはなく、広田村の旧村役場に開校した早岐家政女学校の教師を勤めている。

文展…文部省美術展覧会（初期文展1907～1918）後に帝展、文展へ改組され現在は日展となっている。



志方　茂

第12章

引揚げ

1945年（昭和20）8月15日、戦争が日本の敗戦によって終わると、海外から軍人や一般の人たちが[10]引揚げてきました。そのため、[11]全国に引揚げの港が指定されました。佐世保港内の浦頭もその一つです。

ここには、上陸用の桟橋や伝染病予防のための検疫所がありました。引揚者は、ここで消毒や診察を受け、旧針尾海兵団（現在のハウステンボス）に置かれた引揚者援護局まで約7キロの山道を歩いて、旧兵舎を利用した宿舎に入ったのです。引揚者は、ここで数日を過ごし、国鉄南風崎駅（現JR南風崎駅）からそれぞれの故郷に帰って行きました。

現在の浦頭全景

10　終戦直後、海外に残された日本人は総人口の約9％にあたる660万人にものぼった。民間人が海外から帰ってくることを「引揚げ」といい、軍人が帰ってくることを「復員」という。

11　横浜（神奈川県）、浦賀（神奈川県横須賀市）、舞鶴（京都府）、呉（広島県）、仙崎（山口県長門市）、下関（山口県）、門司（福岡県）、博多（福岡県）、佐世保、鹿児島の10ヵ所が引揚げ港に指定された。

上陸する人たち
浦頭引揚記念資料館所蔵

検疫所での消毒
浦頭引揚記念資料館所蔵

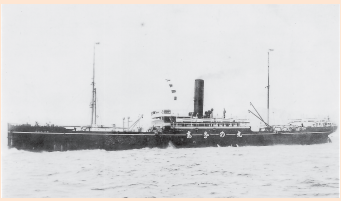
釜墓地

1950年（昭和25）まで、佐世保港に上陸した引揚者は約140万人にも達しています。また、日本各地に労働者として強制連行されていた朝鮮や中国の人たちも、ここから祖国へ帰りました。

なかには、遺骨になって帰国した人もいました。これは、援護局の手で火葬にされ、引き取り手のない遺骨は、釜墓地に葬られています。

コラム～最も働いた船～

戦後、浦頭に入港した引揚船の中にひときわ古い船がいた。その船の名は「信濃丸」という。日本船舶史上、信濃丸ほど働いた船はいなかった。この船は1900年（明治33）にアメリカ航路用の貨客船として完成した。作家の永井荷風もアメリカに渡るときに乗船している。



信濃丸
※写真提供：日本郵船歴史博物館

1904年（明治37）に始まった日露戦争では偵察任務につき、戦争の勝敗を決した日本海海戦ではロシアのバルチック艦隊を最初に発見し、「敵第二艦隊見ゆ、203地点、0450（午前4時50分）」の無電を発して一躍有名になった。日露戦争後は再びアメリカ航路に戻り、アメリカ航路引退後は近海航路に移った。中国の革命の父、孫文が日本に亡命したのもこの信濃丸であった。

近海航路からも引退した後は漁船として使われ、太平洋戦争では陸軍の輸送船として使われている。漫画家の水木しげるも信濃丸で戦地へ向かった。戦争を生き延びた信濃丸は復員輸送船として働き（大岡昇平の小説『俘虜記』にも登場している）、その任務を終えた1951年（昭和26）ついに廃船となり、その劇的要素に富んだ51年に及ぶ生涯を閉じた。

地域の年表

時　代	出　来　事
縄文時代	約2,500年前の縄文晩期に人崎遺跡で畑作が行われていた。
弥生時代	約2,200年前の弥生時代に高畑遺跡で狩猟や畑作が行われていた。
古墳時代	約1,500年前に江上浦を望む松ヶ崎に古墳が造られる。
平安時代	
1189年(文治5)	明星ヶ鼻経塚が営まれる。
鎌倉時代	
1333年(元弘3)	針尾兵衛太郎入道覚実が江上と小鯛と大村の鈴田を領する。
室町時代	
1346-69(正平年間)	針尾勘解由太夫藤原家盛が彼杵一揆連判状に名を連ねる。
戦国時代	
1563年(永禄6)	針尾伊賀守が横瀬浦襲撃事件に加担する。
1572年(元亀3)	針尾伊賀守没す。(1573年説もある)
1572年頃	針尾伊賀守の次男の針尾三郎左衛門、松浦方の針尾攻めで戦死。 針尾伊賀守の三男の針尾九左衛門、針尾島を出る。
1586年(天正14)	佐志方善芳、広田城で大村方と戦う。
1599年(慶長4)	針尾九左衛門、大村で230石を給される。
江戸時代	
1717年(享保2)	小値賀の小田重利、江上指方新田を完成させる。
1754年(宝暦4)	江上赤子新田完成。
1800年(寛政12)	船釜経塚ができる。
1861年?(文久元)	雛崎に狼煙場が造られる。
近代	
1882年(明治15)	鳳鳴書院完成。楠本端山・碩水が子弟教育にあたる。
1897年(明治30)	鳳鳴書院閉鎖。
1922年(大正11)	針尾送信所完成。
1944年(昭和19)	針尾海兵団発足。
1945年(昭和20)	海軍兵学校針尾分校開校。
現代	
1945年(昭和20)	浦頭が引揚港に指定される。
1950年(昭和25)	引揚者援護局解散。
1955年(昭和30)	崎針尾、江上村が佐世保市に編入される。
1992年(平成4)	ハウステンボス開園。
2013年(平成25)	旧佐世保無線電信所(針尾送信所)施設が国の重要文化財となる。